

「盲ろう者」として自分らしく生きる ～私にとって障害・仕事・支援とは～

中 條 與 子 (Nakajoh Yohko)

第3回

私って、何者なん？

身体障害者手帳が私に貼り付けるラベル

私は聞こえにくくて、見えにくい「盲ろう者」だ。「盲ろう者」であることは、私のとても大きな部分を占めているが、すべてではない。「盲ろう者」だからできないこと、「盲ろう者」だからこそできることがあると同時に、自分だからできること、自分だからできないことがあることを感じている。そして、もちろんひとりの人間として、「やりたいこと」や「やりたくないこと」があり、それらがぐちゃぐちゃになったものと、日々向き合っているのが私の毎日である。つまり、「盲ろう者」として自分らしく生きるということを、もがきながら模索しながら毎日を生きている。そのような等身大の私を、このマガジンの連載を通して、読者のみなさんにぶつけてみたい。

はじめに

今回は、私が自分の障害をどのように受容してきたかを、具体的に書いてみたい。耳の障害

も目の障害も進行性のため、障害を受容することは、私の人生そのものであり、過去の話ではないが、これまでのことを一度自分自身でしっかり振り返ってみることは意味があるだろう。

これを書く上で、健常者時代（0歳～28歳）と障害者時代（28歳～現在42歳）というふたつの時代にわけてみた。私は、28才までを、自分の「健常者」時代であると感じている。耳も目も悪かったが、自分が「障害者だ」と意識していなかった。人が自分自身を「障害者だ」と考えるのは、いったいどういうことがきっかけになるのだろう。今回のエッセイではそんなことを考えてみたい。

健常者時代（0歳～28歳）

■幼稚園のころ

ものごころがついたころの幼稚園から補聴器をつけていた。つまり、気づいたときには、私はすでに難聴の子供だった。徒歩圏内の、A

幼稚園に通う。当時、私の障害は、親も難聴だけだと思っていたが、あのころから視野狭窄は始まっていたのだろうと感じる出来事がある。

幼稚園で年に何回か避難訓練があった。クラスの集合場所に、何度頑張っても、うまく辿りつけずに、先生に毎回怒られていた記憶がある。視野障害があるとわかった20代の終わり、職場の避難訓練をおおぜいの人と一緒にして、集合場所にうまく辿りつけなかった。すぐに記憶が結びつかなかったが、幼稚園の避難訓練のときも、多分、難聴だけではなく、視野狭窄で、たくさんの幼稚園児の中、自分の先生やクラスメイトを探し出せなかったのだろうと思う。

■小学生のころ

徒歩圏内のB小学校に通う。多分、人生の中で一番、苦勞を知らず楽しく過ごせた時期だった。私の席はほとんど一番前の席だった。母が担任の先生と連絡を取り合い、PTAの役員をしながら、環境を整えてくれていた事も大きいと思う。

学校生活と並行して、週一回午後から少し離れたC小学校に1年生から通った。「きこえの教室」の言語聴覚士A先生から、手作りプリント、国語の教科書、絵本をもとに、発音や会話の練習、ひらがなと漢字の読み書きの授業を受ける。A先生からの宿題は、国語の教科書を音読と50音の発音を毎日することだ。「さ」「し」「す」「せ」「そ」と「つ」の発音が難しく、小学校4年の時に、ようやく50音の発音を全部正しく言えるようになった。A先生、親、教室に送迎するお母さま方に大変喜ばれて、50音を発音することが挨拶の代わりだったくらいだ。その後、私から親とA先生に、50音の発音のできたのでやめたいと伝えて、きこえの教室をやめた。私が社会人になり、接客や場内放送の仕事で人に言葉が伝わらない経験をして、A先生が卒業しても良いよというまで通

えば良かったと何度も後悔することになる。当時の私は、そんな事は想像にも及ばなかった。

習い事は、ピアノ・体操教室・習字・ソフトボール・そろばん・スイミング・スケート等を習わせてもらった。

■中学生のころ

中学校も、徒歩圏内のD中学校に通う。泳ぐのが大好きだったので水泳部に入った。授業は前方の席で受けたが、定期テストで40点代が取れたら良い方で数学で5点を取り、担任より「高校は難しいかもしれない」と言われる。同じ水泳部の友人が私塾に誘ってくれたことで希望の兆しがみえた。

私塾のB先生から、英語と数学を教科書にもとづいて学んだ。英語の読み書きをしっかりとさせてくれた。例えば英語の授業のときB先生が「cave」と英単語を言うと、日本語訳を答えるのだが、私は洞窟だと思って「どうくつ」を「どうつく」と言い続けた。「どうくつ」と言えるまで、みんなの前で何度も練習をさせてくれた。私にとって、第二の「きこえの教室」だった。数学は、教科書の例題を黒板で説明しながら解き、わかるまで教えてくれた。お陰で、英語の教科書の英文は自然に覚えて、数学の教科書の問題も全部解けるようになった。勉強が好きになり、他の教科の点数もアップした。私も学校も親も諦めていた高校に合格することができた。

■高校生のころ～

「網膜色素変性症」と診断

自転車を全力回転させて15分のE高校に通った。やっぱり泳ぐのが好きなので水泳部と、毎日泳ぐことができるFスイミングの選手コースに入った。学校へは病気以外は休まず遅刻もせずに行ったが、授業中は教室にいな

半分参加できず、半分参加せず。先生が書いた黒板をノートに写すことを途中でやめる事が多かった。視野狭窄で黒板が見えにくかったせいもあったと思うが、友達にノートを借りるわけでもなかった。授業中は受けるフリをして、遠くに住む友人に手紙を書いたり、泳ぎ方をイメージしたり、クラスの友達の真似をして、腕と手でイヤホンを隠しカセット式のウォークマンで音楽を聴いた。ある日、あんまり喋ったことがない後席の女の子が「尾崎豊好きなん？イヤホンから、ガンガン音漏れてるので～笑」と書いたメモをこっそりくれて、急いで音量を下げた事がある。難聴なので、「音漏れ」というものの存在を知らなかった。

定期テスト対策は、私塾のB先生から学んだ教科書を地道にやる方法を貫き、本屋の教科書の参考書を立ち読みしたりしながら、赤点を取ったり、高点を取り返したりして、なんとか過ごした。

網膜色素変性症と1年生の冬に診断された。第1回(第33号)のエッセイに書いたように、夕暮れの河川敷で友達と自転車競走を勝つつもりでスタートを切ったが、川と道の境目が見えずに、勝負にもならなかった。友達も私も目がおかしいと思い、親に相談すると「きつと夜盲やわ」「安心するために眼科に行こう」と言われ病院に行くと、経験のない検査をした。両眼に分厚いコンタクトのようなものを入れて、明るい光をずっと当てられ、眩しいけれど瞼を閉じることができず痛くて辛かった。検査の大変さから、病名が不安になった。家を出る前に本棚にある『家庭の医学』で「夜盲症」を調べた。「ビタミン不足」によるもので、症状は「夜が見えにくい」だけで安心した。ただ隣に同じ夜盲の症状の「網膜色素変性症」が並んでいて、「難病」「失明」の言葉に固まってしまった。網膜色素変性症だったら、嫌だなと思った。

予感的の中し、先生から「網膜色素変性症」

と診断され、「将来は失明する可能性がある」「視力があるし、良い薬が出ているから大丈夫」「紫外線が目が悪いので、外出する時はサングラスをかけなさい」と言われた。また、治療法がなく、経過観察と言われた。

そして、治療法がないため国の研究対象になること、それにより、医療費の一部を国が負担してくれるという「特定疾患医療受給者票」を、保健所で申請することをすすめられた。

長く黙っていた母が「水泳は続けても良いですか？」と訊ねた。先生は私が泳いでいることを知っていたので、水中ではゴーグル、屋外ではサングラスをすることを条件に、許可してくれた。

帰り道、母がすぐにサングラスを作りにいこうと言った。水泳を続けるかわりに、紫外線から目をしっかり守ることを約束した。そのとき母が「(特定疾患医療受給者票は)初めて社会から私の目を認めてもらえたみたいやな。」「興子の病気のためなら、お金は負担ではない、いくらかかってもいい。そこだけは間違えてほしくない。」と言ったことが印象に残っている。

私の想像だが、母にとって、私が「特定疾患医療受給者票」をもつことで、国から医療費を負担してもらえることよりも、それによって私の目の状態が普通ではないということを社会的に認められたと感じたことに意味があったのだろう。

私は3歳のとき、耳鼻科医から感音性難聴と診断されて、補聴器をつけていた。また、難聴のため、きちんと発音できず苦労してきた。それでも、身体障害者手帳の交付対象ではなかった。私がものごころついたときから、母が私の難聴を誰かに説明するときはずっと「軽度の難聴」だと伝えていた。社会的に認められる障害ではないが、普通の人と同じように聞こえない、人とはちょっと違うことを、表現するための言い方だったのかもしれない。私も母の表現を真似て、「軽度の難聴」と説明してきた。

網膜色素変性症と診断された後も、それまでどおり、夜や暗いところが見えにくい以外は、特に学校生活もクラブも何も変わらなかった。変わったのは、網膜色素変性症にかかる医療費を一部負担してもらかわりに、一年に一回、保健所に問診票の質問事項に答えて、保健師に目の変化や悩みを報告することだった。

当時は両眼とも裸眼視力が1.5もあり失明をイメージする事が難しかった。主に屋外で泳ぐため紫外線に当たることになるため、失明を早める危険性があった。水泳は本当に自分がしたかった事なので、続けられるなら失明しても良いとさえ思ったが、正直、失明とはどんなものだろうかとまったく想像できなかった。この先どうなるかわからないという大きな不安を抱えることになった。その不安感から、想像できる将来は、大学生くらいまでだった。

高校卒業後の進路を考えたとき、私には仕事ができない予感があった。働く時期を先延ばしするために大学受験を決めて塾にも通った。大学受験では、高校からもらった特別推薦枠1校と9校を受けたがすべて不合格だった。浪人して再チャレンジしたいと考え、予備校を探していると、阪神淡路大震災が起きた。幸い、私自身も、私の家族も家も無事だった。大震災で設けられた「特別枠」で大学受験のチャンスが訪れて、受かるはずなかった大学に現役で合格することができた。

■大学生のころ

強運のお陰で合格した G 女子大学文学部児童文学科には、バスと電車とバスを乗り継いで通うことになった。入学当初、難聴であることは、友達には言っていたが、ゼミの C 先生には言う機会がなかった。創作童話が楽しそうと思って入学したが、授業は創作童話だけではない。児童文学と子どもについて学んだ。授業にはついていけず、1回生の必修専門科目の3分

の2は「不可」、語学(英語・フランス語)も「不可」をもらって、再履修を重ねた。

■オーストラリア語学研修～障害と孤独

2回生の春休み、大学からオーストラリアの大学に語学研修へ観光気分で行った。滞在先は、仲の良い友人Dとペアだった。

ホームステイ先で、友人Dは一生懸命、ファミリーと英語でのコミュニケーションに挑戦し、私は隣で黙って聞いていた。英語なので日本語以上に何を言っているのかまったく聞き取れなかったが、いつもどおり黙って聞いていた。最初はとても元気だった友人Dはある日から元気がなく寝室に閉じこもるようになった。「ファミリーから『英語が前の日本人のほうが上手だったわ』と言われてショックを受けただけ、気にしないで」といいながら、学校と食事以外は早々に寝室に閉じこもる。それは、難聴の私が、時々ひどい孤独感に襲われ、落ち込んですることとよく似ていた。

友人Dを心配するファミリーと、今度は私が積極的に会話をしてみた。英語が少しわかり始めた頃、友人が復活して元気になりファミリーとの会話を楽しむようになった。

休日には郊外に出てファームステイをした。牧場の家族と友人Dと私とで、夜は空を見上げた。満点の星の美しさに、友人はこれまでに聞いたことのないような感嘆の声をあげて、感動して泣いていた。私が同じように夜空を見ても、星空はなく、ただ暗闇があるだけだった。このとき、同じ空間にいても、私は人とは同じものが見えない、みんなと感動を共有したくても、私だけ見たいものが見えない、ということに気付いた。人とくらべなければあまり自覚できなかった、自分の視覚障害を、このときに突然に痛感して、涙がぼろぼろとあふれ出て止まらなかった。

■私が見つけた「参考書」

3回生でも1回生から必須科目の再履修をしていたが、大学図書館によく行っていたお陰で、先輩方の卒業論文の存在に気づくことができた。先輩の卒業論文が授業の「参考書」となり、とても助けられた。卒業論文そのものだけでなく、引用文献を読むことで、児童文学が面白くなり3回生で再履修を終わらせることができた。

ゼミは希望した創作童話のゼミの選考試験に落ちて、児童詩のゼミに入った。卒業論文では阪田寛夫の方言を扱う児童詩をテーマに書いた。C先生から、「あなたの言いたい事がよくわからない」とよく怒られていたくらいなので、論文は目茶苦茶な構成だった。審査も厳しいものだったが、C先生が二年間で成長したこと、着眼点と引用文献を多く扱ったことを無理やり過大評価して、他の審査の先生を説得してくれた。C先生と強運のお蔭でG女子大学を無事に4年間で卒業できた。

■就職活動～「手帳が欲しい！」

就職活動はどう取り組めば良いかわからなかった。ホテル業界に憧れていたのので、出せるだけハガキを書いて資料請求した。一次筆記試験はほとんどホテルの大宴会場で行われ、マイクで説明される内容は、素晴らしく会場に響き、難聴の私には聞きとれなかった。当時は自分が難聴だと伝える事は、「落としてください」とお願いするようなものだと思い隠した。奇跡的に面接まで進んだこともあったが、集団面接で落ちた。試験官の質問は聞こえにくく他の10名くらいの受験者の言葉は聞こえなかった。面接で質問に対する答え方を学ぶ、考えるという事もできなかった。聴覚障害を隠して就職できる可能性がないことを確信した。

東京で障害者向けの就職説明会があると大

学のポスターで知り、日帰りで朝から夕方まで色々な会社のブースに行った。身体障害者手帳がないと言うと、面談はやんわりと終わった。障害者向けの就職には身体障害者手帳が必須だった。

身体障害者手帳を持っていなければ、社会は私を「障害者」と認めてはくれない。認めてもらわなければ、就職も難しい。生きていくためには身体障害者手帳が必要だと感じた。心から「手帳が欲しい！！！！！」と思った。

■身体障害者手帳取得へ

病院で、聴力、視力・視野検査を定期的に受けていたが、検査結果に変化はなく、「良好」だった。また、毎年夏頃に保健所に行き、保健師に問診票を渡して、面談で悩みを報告したが、特に何の助言もなかった。(いま思うと、多分、保健師は助言する立場になかった。) 私が身体障害者手帳を取得したいと思っても、検査結果や保健師の反応で、取得できるほどの程度ではない事を感じていた。

自転車に乗る人から、よく睨まれるようになった。呼び鈴に気づかないせいかなと思った。歩いているとき、前方なら自転車が近づいていることは、気づくこともあったが、後ろや、横からくる自転車に気づけなくなっていた。

私は、白杖を持つと思った。初めて会う、一瞬で過ぎ去る自転車の人にも、私を睨まずに、納得して通り過ぎてくれるのには、どうしたらいいんだろうと、睨まれるたびに悩んだ。そこで、夏ごとに報告に行く保健所で、白杖を持つ同じ網膜色素変性症らしい人がいた事を思い出したのだ。私も白杖を持って良いのではないかと思った。難聴を知らせたくて白杖をもつ、おかしい話だが私は真剣にそう考えていた。

白杖は眼科で売っていると思い、近所の眼科行くと「障害者手帳を持たない人が白杖をもつことは、犯罪に近い」と言われた。その言葉を

真に受けたわけではないが、白杖が欲しいという気持ちはさらに強くなった。私の目は本当に悪くないのかなと思い、病院めぐりを始めた。

病院めぐりをした数年後、晴れて28歳の年末、視野障害だと認定され身体障害者手帳3級の交付を受けた時、とても嬉しく仕方がなかった。白杖を、堂々と持てるようになった。(実は、私は、白杖の便利さと素晴らしさを知ってしまっていて、すでに遠慮がちに使っていた。)身体障害者手帳によって、私は「障害者」だと社会に名乗ることができるんだと思うと、何かから解放された気持ちだった。

目で身体障害者手帳3級の交付をうけて障害者になっても、私は私であり、交付をうける前の私と何ら変わらない。そう思っただけでも、身体障害者手帳、また白杖というものが、誰の目にも疑いなく、私に「視覚障害者」というラベルを貼ってくれたのだ。

障害者時代 (28歳～現在)

■ 社会の変化、人の変化

その頃、仕事を探していることを会う人、会う人に伝えると、視覚障害者を探している派遣会社があると言われた。仕事内容は大学で事務と決まっていた、経験のない仕事で不安だったが、応募して採用された。身体障害者手帳がない時にはなかった、採用のプロセスに戸惑った。派遣会社の社長も担当者も障害のことを詳しく聞きいてくれて、嬉しかった。派遣先の大学では、パソコン業務と、書類の整理をした。

あるとき、職員の人たちの間を通ろうとしたとき、手をあげて私が当たらないように一斉に道をつくってくれた。大げさだな、視覚障害者イコール全盲と思われているのかな、でも、馬鹿にされているわけでもなく、顔をみると真剣に避けてくれていると感じ、なんだか温かいものを感じた。

白杖を持って街を歩けば、自転車に乗る人から睨まれることはなくなっただけではなく、知らない人が、次々と道を開けてくれて、なんだか照れくさかった。母と一緒に歩くときは、そんな反応を見てか、私が持つ重い荷物だけ、私が断っても母が持つようになった。また、バスに乗れば、白杖を持つ私に気づいた80代、90代のご高齢の女性までもが、立ちあがって、笑顔で私に席を譲ろうとしてくれた。その席に座るのは、誰から見ても、そのご高齢の女性だろうと、戸惑った。

幼少の頃からの私を知る、二人のご高齢の方に、私の白杖を持つ姿を見て泣かれてしまった事も忘れられない。一人は近所に住むご高齢の女性で、道端で会い、挨拶をすると、白杖を持つ私に驚かれて、立ち止まって声をあげて泣かれてしまった。もう一人は、母の親友のお母様だ。幼少の頃は母と泊まりで遊びにいき、よくしてもらった。母と母の親友と親友のお母様と私とで、一緒に食事をする事になり、久しぶりに会った。私の白杖を持つ姿に驚いて道に座り込んでしまい、泣き崩れられてしまった。二人とも、私が見えているから大丈夫といっても、伝わった気がしなかった。こんなに人生の先輩に泣き崩れられる事は、経験がなく、戸惑った。

あるとき大学時代に同じゼミだった友人Eと久しぶりに会い、白杖を見てちょっと驚いていたが普段通り一緒に歩いた。ひと段落して、一緒に街をあるくと道を開ける人たちに驚いたことを、言ってくれた。私も驚いているけど、白杖を持てたことはとても嬉しいことだと、嬉々と話した。私が調子にのるところもあると知る友人Eは、「気づかなくても、見ず知らずのたくさんの人が、あなたのために、道をあけてくれていることを、絶対忘れたらあかんよ」と言ってくれて、驚いたけれど嬉しかった。

■ 自分の変化

白杖を持ち、身体障害者手帳を取得した頃から、いろいろな集まりに誘われるようになった。

ある視覚障害者の集まりHは、大学病院の待合室の壁に、チラシを掲示されていたことがきっかけで知り、白杖を持ちたい旨の相談をメールすると、視覚障害者施設Iまで一緒に買いに付き合ってくれた。

その後Hの集まりに参加すると、20代から40代の自分と年齢が近い視覚障害者の人や、視覚障害に関わる仕事をしている人たちと出会った。一緒に料理をしたり、お茶をのみながら、仕事、友達、恋愛、結婚、子育てのことなど、いろいろな話をした。毎年夏に行く保健所では、同じ網膜色素変性症らしい人を見かける事であっても、年代はご高齢の方が多く、交流する機会もなかったのが新鮮だった。

また視覚障害のJ団体では、サロンを開き、白杖や眼球の動かし方などを教えてくれる講座をしていることを紹介されて参加した。サロンでは、参加者のみんなで、視覚障害の機器を取扱う業者の人の話や、クライミングをする当事者の話を聞いたり、講座では白杖の使い方、街の歩き方などを学んだ。終わった後、みんなでランチにいたり、仲良くなった人と遊びに行ったりすることも、楽しみの一つだった。幅広い年齢層の視覚障害の人や、視覚障害にかかわる仕事をしている人との出会いがあった。

私と同じ見えにくくて、聞こえにくい人にも、J団体のサロンで初めて出会った。Fさんとは、年は離れていたけれど、一緒にランチを食べることが楽しみだった。いろいろな視覚障害者の人や、それに関わる人との出会い、だんだん顔見知りになっていく。集まりに行けば、みんなに会える。

見えない人、見えにくい人、見える人の集まる場の多くは、お互いの存在が把握できるように声を出すことがとても重要で、必ず自己紹介タイムから始まる。名前、居住地、所属を簡単に伝えるだけでなく「自分の見え方」を紹介

する。視力、視野などの見え方、いつから悪くなったか、今はどうなのか・・・さらに、見えない、見えにくいことによってもたらされるもの、エピソードもついてくる。働くこと、家族、子供のこと、白杖のことなど、自己紹介が人生を語る時間にも変わることも少なくない。予定時間、予定プログラムを狂わせる恐れのある自己紹介タイムだが、個人的には、そんな時間に感動さえ覚えた事もある。今まで聞いたこともないような濃密な自己紹介タイムだからだ。私が自己紹介するときは、他の人の刺激をうけて長く喋ることもあるが、たいてい、こうだ。「K市から参りました、中條です。私は網膜色素変性症で手帳は視野狭窄で3級です。視野のかの欠け方は、中心が見えて、周辺部分が欠けています。」と伝える。難聴のことは、この場で言うほどのこととは思わなかった。

そんな出会いに恵まれ、視覚障害者になれて良かったと思った。私も視覚障害者の一員だと次第に強く感じるようになった。

■「視覚障害者」というラベルの重さ

一方、耳は相変わらず、聞こえにくいままで、家族や友達、職場の人との会話で、「え?」「なんて?」と聞きとれなかった言葉を聞き返しても、「そんな大した話じゃない」とか、「なんでもない」などと悪気はなく言われて、もう一度聞こえるように繰り返してくれる人は、ほとんどいなかった。白杖や手帳を持つことで、私の視覚障害のことは伝わっているけれど、正直、自分の見え方のせいで私が感じていた不自由は大したことはなかった。

「不自由」を感じなかった理由を、掘り下げて考えてみる。視野が狭かったが、その狭い視野で見えるものを見る世界で生きる「不自由」は、見えにくい足下にある洗濯物の籠を蹴飛ばしたり、扇風機にぶつかったり、車止めに当たって痛い思いをするぐらいだ。難聴が私に感じ

させる「不自由」と比べ、視覚障害が私に与える「不自由」は無いに等しかった。

大勢で話しているときに、会話にひとりだけいつもついていけなくなる。聴覚障害は、私をいつもいつも孤独にさせる。胸の奥が縮こまるように締めつけられ、とても痛くて、その場所にはいけないような、私は存在していないかのような気持ちにおとし入れられる。言葉は聞こえなくても、喋り方や声のトーンで、その人の話、面白そうだな、聞きたいな、と惹きつけられる。そんな中途半端な自分の「聞こえ」の状態に耐えるのが辛かった。誤解を恐れずに言えば、いっそのこと、全く聞こえなくなっほしい、聞くことから解放されたいとさえ思った。

ファームステイの星空のことを思い出してみる。同じ夜空を見ても、友人や牧場の家族から漏れてくる感嘆の声から想像される、驚くほどの星空は、私にだけは見えていない。あのとき、見えないことが原因で、人と感動が共有できないという初めての経験に涙が溢れ出たが、現在の私が振り返っても、見えないことで涙が出るほどのつらさを感じた経験は、数えるくらいしかない。この時の涙と、私が日常的に難聴によって感じている「不自由」。共通するのは、孤独感だ。

自分が障害者として本当に辛いのは、孤独を感じる時なのではないか。もしそうだとすれば、身体障害者手帳がない聴覚障害の方が、ずっといつもいつも私に孤独を感じさせる。私にとってつらい障害だ。とても不自由だ。しかし、自分でも、自分の難聴を伝えるときは、障害者手帳を持っていないので、「軽度の難聴」「ちょっと耳が悪い」と伝える。そして、手帳のおかげで、自分自身も自分を「視覚障害者」で、「ちょっと耳が悪い」と、言葉通りに思いこんで過ごしてきた。

しかし、最近、私が入びとに伝えたい、知って欲しいと思う私の不自由さは、視覚障害ではなくて聴覚障害のほうだと気づき始めた。白杖

をもつ私にぶつからないように、私が気づかないうちに道をあけてもらうことより、「え？」と聞き返したら、もう一度ゆっくり、少し大きな声で教えてもらえることの方が、現在の私の障害のつらさを何百倍もやわらげてくれるだろう。そうしてもらえれば、私は一緒に話をすることができて、いつもやっているように聞こえているふりをしなくてすみ、孤独感から解放されるのだろうから。

確かに、身体障害者手帳の交付は、私に生きることを可能にしてくれた。この私の耳と目の状態では、働くために採用試験に合格すること、奇跡的に採用されたとしても雇用継続が難しかっただろう。しかし、交付を受けたことで、雇用形態が非正規職員でも、障害者雇用として採用され働くことができることは、とても大きかった。私はとても勇気づけられた。また白杖を、社会的に認められた視覚障害者として堂々と持つこともできた。そして、障害者になったからこそ出会えた人たち、視覚障害者の仲間がいた。視覚障害者になれて良かったと心から思った。仲間ができて、満たされたような気がしていた。

その一方で、自分自身が自分の辛さについてよくわからなくなっていた。中途半端な聴覚障害のせいで、私は孤独感をいつも味わい、それが私の今の一番の不自由だ。このことが、このエッセイを書きながら、明確になってきた気がする。このことに長く長く気づけなかったのは、視覚で身体障害者手帳をもらった事があまりにも大きかったのだ。それくらい、身体障害者手帳が私に貼り付けるラベルは重いのだ。社会だけではなく、自分自身が私に「視覚障害者」というラベルを貼りつけたのだろう。今、そう思える。身体障害者手帳に貼り付けられるラベルは、自分のこころの奥底の孤独感という本当の気持ち、とても大切な気持ちのもとさえ見えなくしてしまう。怖いくらい重い。そのことに、気づくことができた。

私の日常② 趣味は写真を撮ること



趣味は写真を撮ることだ。視覚障害者が写真を撮ることを、ええええええ???と驚かれるかもしれないが、写真を撮ることが好きだ。

私の視野は「360分の1度」だが、スマートフォンの画面の中にある、シャッターボタンを押すだけなので撮ることができる。写真のように、白杖を持ちながら撮ることも、よくある。

写真の良さは、あとで写真を見返すことができる。画像の端から端を見ることで、気づかなかったことにも気づく。また、私は網膜が悪いので、コントラストの感度がわるい。例えば虹が自分の目では見えにくいけれど、写真で見ると、色が鮮やかで、くっきりする。実物で見ると、きれいに見えるので好きだ。

そして、写真の映像が実物で見るとよりコントラストがはっきり、くっきりすることをいかして、落とし物を探すときにカメラを通して探す。例えば肌色の補聴器を床に落とした場合、床と補聴器が同化して見えても、カメラを通して探すと、くっきりと肌色の補聴器が私にも気づきやすくなり、とても役に立つ。

また、スマートフォンのカメラを通して、暗

いところが、それなりに見える。そう知ったのは、ある海外旅行の時の夕食時に入ったレストランだ。外のテラスしか席がなかったため、私を夜盲と知る友人は、手引きと言葉で食事を説明してくれるので不自由はなかった。しかし、私は一生、もうこの場所に来る事はない。「この美味しい料理を見たい!」「周りの景色も見たい!」という願望があふれる。写真で撮った後で見ることができるのではないかと思い、デジカメで撮り始めると、液晶モニターから料理が見えるではないか。私の突然の欲望をたまたま持つカメラが期待以上に満たしてくれた。

スマートフォンは、デジカメの性能より劣るかもしれないが、夜道であれば歩く道がくっきり見えたり、映画館であれば座席や通路、座席番号が見えたり、宿泊先でエレベータのボタン、ドアのキーを入れる場所を探すのに、役に立つ。私にとって、スマートフォンは、写真を撮るための道具ではなく、懐中電灯より薄くて軽く、私の暗闇を照らしてくれる。白杖に並んで大切に必要不可欠なものだ。